

福應寺毘沙門堂奉納 養蚕信仰絵馬

FUKUOUJIBISYAMONDOUHOUNOU
YOUSANSHINKOUEMA

基本情報 ■作者：不詳 ■時代：明治時代 ■寸法：①縦13.6cm 横19.4cm

厚さ0.7cm ②縦13.4cm 横18.4cm 厚さ0.9cm ③縦15.0cm 横20.84cm 厚さ1cm



養蚕の成功祈願と倍返し

角田市福應寺毘沙門堂の奉納絵馬

東北学院大学博物館では、角田市福應寺毘沙門堂に奉納されたいわゆるムカデ絵馬を3点所蔵している。これは、現在国の重要有形民俗文化財に指定されている「福應寺毘沙門堂奉納養蚕信仰絵馬」（平成24年3月指定）と同様に毘沙門堂に奉納されたもので、文化財指定される前に学術研究資料として収集された。ムカデ絵馬は、養蚕の成功などを祈願して、養蚕の大敵であるネズミ除けのためにムカデを描いたもので、庶民の信仰の一端を知ることができる興味深い資料である。

角田市福應寺毘沙門堂の絵馬は「倍返し」という奉納の習俗によって、膨大な数が奉納された。奉納者はすでに奉納されている絵馬を借り受ける。その後養蚕成就が無事に達成したならば、お礼として新たに絵馬を一枚作り、借りたものと共に倍返しをする。こうして絵馬が倍になって増えていくのである。倍返しの習俗は快癒祈願や旅の安全を願うときなど、養蚕成就祈願特有のものではない。また奉納に用いられるものは、絵馬だけではなくわらじや賽銭など様々である。

なぜムカデを描くのか

養蚕は農家の現金収入源であったが、不安定なものだった。蚕の餌となる桑の不作、蚕の病気、ネズミによる食害などがその原因である。福應寺のある鳩原地区においては、毘沙門堂の使いである「ムカデ」がネズミを追いかうものとして信仰されたが、県南地域には丸森町の「猫神」の石碑などもあり、ネズミが蚕や繭の中のサナギを食い荒す被害は切実な問題だったのである。

なぜムカデのモチーフが描かれたかについては、はっきりとした理由はわからない。地域で

は大きなムカデは独特な臭いがするため、ネズミは遠くにいても臭いを嗅ぎ分けて近寄らないと言われている。そのためこの地域では、ムカデは蚕の守り神のような存在になったと考えられるのである。

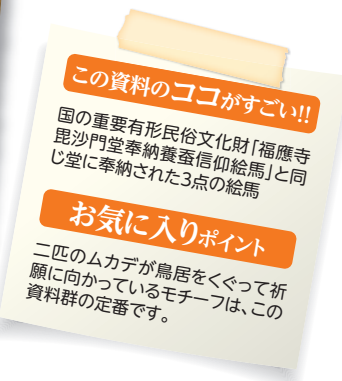
ムカデと人間

ところで、本資料のように庶民がムカデを描いたり信仰したりする民俗は、どちらかといえば珍しいものといえる。この絵馬の興味深いところは、つがいのムカデが鳥居を目指して這っているモチーフに、奉納者自身が投影されているように見えるところであろう。つまり奉納絵馬に描かれたムカデは擬人化されているのである。

擬人化されたムカデというモチーフは、ムカデが登場する日本の説話や昔話を想起させる。俵藤太が近江の三上山のムカデを退治する功名譚や、狸師が山の主であるムカデの目を射て日光権現から狩の許可をもらう東北の狸師の縁起など、ムカデは神の化身や精霊として描かれる。また、「ムカデの使い」という昔話がある。ある時、虫たちが鍋を囲んで宴会をしていると、カマキリが急に腹を下した。モグラの医者を呼んでくる使いに指名されたムカデは、たくさんの足に草鞋を履くのに手間取ってしまう。結局、カブトムシが代わりに使いに走り、カマキリは事なきを得るというコミカルなストーリーである。

ムカデは、刺されると厄介な害虫であると同時に、擬人化して奉納絵馬に描かれるようなアンビバレントな存在である。本資料には、そうした人と自然との複雑な関係が見てとれる。

学芸員 加藤 幸治



学芸員の目



学芸員
加藤 幸治

宮城県の県南地域は、江戸末期から明治期にかけて養蚕がとても盛んでした。明治に入ると富岡製糸場に代表されるように機械化によって絹布の大量生産が始まり、20世紀初頭に日本は世界一の生糸輸出国になりました。その原材料生産としての養蚕が全国的に広まり、そうした時代の庶民が養蚕の成功を願って奉納したのがムカデ絵馬でした。